

保育所づくり中心の施設型福祉を見直す必要があると考える。欧米では、保育所以外にも家庭内保育や小人数保育など、さまざまな形態がある。NPOの進出を促進し、放課後教育も含めて子育て支援を充実させていく事も考える時である。

また、国は、保育所の運営費の基準額を定めている。

しかしながら、それでは、人手も設備も十分ではなく、保護者の保育料負担も重過ぎるため多くの自治体は独自に上積みしている。

財源の問題は、大問題ではあるが、何が、子どもにとって幸せな事なのかに常に視点を注ぎ支援策を構築していく事が一番重要なことであるとする。

(5) 国において、民間において、地域において行う少子化対策について

少子化対策については、年齢や性別に係りなく能力に応じて働ける社会を構築することが重要である。定年延長や継続雇用の促進、募集・採用における年齢制限の緩和、有期労働契約、派遣労働など雇用の選択肢の拡充、雇用に関する性による差別の撤廃等の施策を推進すべきである。そして、働きやすい社会環境づくりをする。

また、女性の就業意欲を阻害しないために、社会保障制度等を中立的な観点を加味しながら、持続可能なものに構築していくことが必要である。

子どもたちにとって、何が幸せなのかという視点にたって、多様な保育・子育てニーズに対応できるように保育サービスの拡充と質的向上に向けた規制も緩和すべきである。幼保一元化の一層の促進や放課後教育のあり方も含めて、いつでも・どこでも・だれでも享受できるサービスの質も量も満足のいく施策の推進の必要がある。

施策の策定は、あくまで国ではあるが、実施・実行する現場は、当然、地域である。その担い手の多くは、民間である。その点からもサービスの質的向上（量的には当然のこととして）を望むなら、あらゆる法人（民間営利企業も含めて）が、参入できる市場に育児・子育て市場が、成長しなければならないと考える。なぜならば、社会福祉の専門分野的市場が、措置から契約に転換したことにより、個人の意志でサービスを選択することになったからである。サービス提供側の論理は、競争市場には、無力であり、サービスを求める、必要とする個人の意志こそ選択には、重要であるからである。

さらに、それぞれの地域には、特色や独自の生活観がある。その多様な価値観のもと、地域毎の独自の施策もあってしかるべきであろうと考える。少子化対策についても、地域ごとの少子化に伴う問題があるはずであるから、その解決策（対応策）についても、地域ごとの施策があるとする。ある地域に当てはまる施策だとしても、他の地域に当てはまるとは限らない。逆効果になることも考えられる。

要は、地域の少子化の要因の正確な抽出こそが、少子化対策の施策には、最重要である。

そのためには、地域の情報の収集・分析が、不可欠であると同時に、その情報を公開して国民に示し、その地域に合った施策をその地域の意志で、選択させることで、実効性がより高まるのではないかと考える。

また、神奈川県横須賀市のたすけあい横須賀のシニアによる子育て支援事業の例に見られるように、NPOが、自治体の子育て支援事業を受託して、少子化対策を実践している事例もある。これは、高齢者（シニア）が、長年家族の中で培ってきたこれらの知恵や経験を活かし、生きがいを感じながら、それを、社会に還元している理想的な事例である。

このように、ボランティアを持った方々が、暮している地域で それぞれの能力を最大限発揮できるようにしなければならないと考える。

先述のように、国・地域・民間とそれぞれの立場で、少子化対策に取り組むことにより、女性の社会進出の円滑化や高齢者の意欲と能力を活かせる雇用システムの構築が、図れる。と、同時にNPO・ボランティア活動の促進も推進できる。ひいては、子どもを産み育てやすい環境の整備につながり、少子化の流れも変えることが出来うると考える。

(6) その他御自由をお願いします。

題(1)～(5)に記載させていただいた意見は、主として育児・子育てを中心に 女性の社会参画の推進の立場から、述べさせていただいたものである。

少子化社会への対策を考える時、今後は、今までの医療・年金・福祉(介護)の3本立ての社会保障制度に 育児・子育てという要素が、加味されなければならないと感じている。

出来うる事ならば、育児・子育てを独立・特化させた4本立ての社会保障制度への転換に期待している。

しかしながら、社会保障制度を 持続し、より成熟したものにするためには、その財源の裏付けがあるということが、大前提である。

財源の確実な確保という大命題には、今こそ 国民運動として 取り組むべき時期に来ていると考える。

細川内閣当時の福祉目的税に検討加えるにしてもいいし、新たに、社会保障目的税でもいいであろうし、また、育児・子育て支援税でもいいと考える。

ただ、ここで、大切なのは、負担と受益のバランスの問題と 国民が少子化社会の対策の必要性を認識しているかどうか、また、納得が得られるかどうかという点である。

民主主義国家として、国民一人一人が 議論し、そして、認識し、納得して超少子化社会へ船出していかなければ、今の社会環境のままでいけば、経済の衰退をはじめ国力の衰えを招き、国際的にみても有数の生活水準の高さを維持できないと考える。

国力を衰えさせずに、今以上に国民が、生きがいを持ち、働きがいがあり、のびのびと生活

できる環境を 創造するためにも 今、国民は本気で、少子化対策をすることが、急務である。

誰もが望む理想の生活は、「常に満足感に溢れ、安心（安全かつ安定）した生活が、営める国家を基に地域に根付く信頼のネットワークの中で、享受できるサービスが、個人の意志で選択でき、自助と共助のバランスのとれた生活」であろうと考えている。

「安心」「信頼」「選択」をキーワードに、今以上に「満足」が、得られることが、のびのびと、生き生きと暮していけると考える。

今こそ 元気で意欲のある先人が、戦後の日本の復興を成し遂げた時のように、貴重な知恵や知識や経験を活かし、ボランティアを持ったまちづくりの理念を踏まえて行動を起こす時である。

老若男女を問わず、のびのびと生きがいを持って、生活でき、働き甲斐があり、個人の資質や能力が最大限発揮できるシステムを構築しなければならない。

いつでも、どこでも、だれでも安心して暮せる地域にそして、日本にするために、地域で異世代の交流が、より活発に、また、世代独自の資産が、共有でき得るシステムや仕組みが必要である。

個と公の調和のとれた日本になり得るために、微力ながら、(社)日本青年会議所は、全国747の地域の青年会議所のメンバーとともに、全国5万人メンバーとともに、また、20歳～40歳の子を持つ親の世代の責任を自覚しながら、邁進していく所存である。

以上

少子化社会を考える懇談会 提出書類

いいお産の日実行委員会事務局長 水戸川真由美

<1>

私は子供を産もうというときには3つの観点を考えるのではないかと思います。

1. 自身の体に変化する（肉体的な変化）
2. 経済
3. 環境

少子化対策も相当することが検討をされていることと思います。

しかしながら、1及び3に該当する、「お産の質」という点についての検討は必要とは思われていなかったのでしょうか？私は子育ては、妊娠した時からスタートしていると思います。女性が身ごもり子どもを産むまでの経過の中で、いろんなことを感じ、考えているはずです。おなかの中の赤ちゃんがへその緒から離れ、自ら呼吸をするその日をどのように迎えて上げるのかを準備をしていきます。お産を通し、その期間はもっとも大切であり、後の子育てへとつながります。不安も沢山あります、初産の場合は「お産」のイメージがとくにつかめません。お産のイメージは「痛い、怖い」ということが強調されているように思います。それは妊婦さんだけではなく、世間一般に伝わっていることです

テレビドラマではつわりといえは「ウツ」と口を押さえ流し台へと駆け寄り、産まれたばかりの赤ちゃんが、真っ赤な血がついたままいる。などがあります。

子どもを産みたくなくなるビジュアルが非常に目立ちます。

「お産」は楽しいものであるということが実感出来れば第2子、第3子へとつながるのではないのでしょうか。

「お産の質」そのものにも着目いただきたいと思います。

<3>

1にも続く内容です。

「いいお産の日」に集まる、お母さん達には大きくわけて2つの思いがあって参加をしているのであらうと思います。そのひとつには、「お産が楽しかった、この思いを皆に伝えたい」ということ、そしてもうひとつには「辛い経験をした、この思いは他の人にはさせたくない」という気持ちが見えます。私は「辛いお産をした」のほうに入ります。

初回の「お産」のトラウマを持つ母親達が多いことにも気がつきました。沢山の訴えを聞きます。

私は何か、不完全燃焼した気持ち、この気持ちの消化の糸口を探る意味もあり活動に参加するようになりました。いろんな情報があり、そして出会いも沢山ありました。初回の懇談会時に子どもは3人おりました、とご紹介させていただきました。18歳、

7歳、4歳の7年おきのお産を経験しております。

初回の「お産」は難産で、子どもにも障害が残りました「二度と子どもは産みたくない」と思っていました。とても辛かったお産の、心のサポートは何も有りませんでした。

聞いて貰える相手もおりませんでした。

すべてが自らの責任という気持ちと、どうしてこうなったのかという疑問が一杯でした。

抱えた気持ちの処理の仕方、消化の仕方に迷いを感じたまま日々過ぎてゆく。

18年前のこの風習はまだ残っているように思います。

元気な子供達に恵まれたお母さん達にも、お産に対する感じた辛さがあっても、まあ、子供が無事でなにより、ということで代償させて、お産そのものには満足していないケースが多々有るように思われます。「お産」が辛いから次はない、と意志を固める人も多いことも少子化につながるのではないのでしょうか。

近年、助産院や自宅出産が増えているということにはなぜでしょう、開業助産師さんの手厚いケアに着目していただきたい。妊娠から出産そして授乳などの産後の継続的なケア、メンタルトータルコーディネーターが出来る存在であるからです。

じっくり話を聞いてもらえる、不安や、相談も聞いてもらいながら、安心感が生まれ、自身もついてくる。取り上げてもらう助産師さんと密接にいられることでの安心感が自主的な気持ちをも芽生えさせてくれるのです。

「お産はたのしいもの」と導く必要があるのではないのでしょうか？

私は14年目にしてそう思えたのは、「いいお産の日」の活動をしていく中で助産師さんの存在、他のお産のサポーター、共鳴、共存してくれる同士のお母さん、そして沢山の情報があることで、まだ「産める」という自身もつき、むしろ「産んでみたい」という気持ちに変わったのは事実です。

回りからのサポートがあれば、こそ、自らの判断の過ちにも気づくことが出来るのです、自主的になれることと思います。

私のように14年もかからなくとも。妊婦が自主的な手段は沢山あると思います。出産準備クラスの充実です。

自分で産む、産もうとする気持ちを育てるということではないのでしょうか。病は気からという言葉がありますが、お産は病気では有りませんが、そんなことも言えるのだと思えます。陣痛は「なんとかしてください」と叫びたくなるほどの痛みを迎えますが「なんとかしてください」ではなく「なんとかしよう」という気持ちを持つことが大切なのではないかと思えます。陣痛のおこる体の仕組みを知らない妊婦（女性）が実はとても多いことに気がつきました。反して言うならば、自分の体を知るという機会を妊娠することによって、改めて見直す機会がもてるのです。紙の上での知識というよりも、お腹の赤ちゃんの胎動などで、自分一人の体ではない、ということを感じさせられるわけですからその気持ちをうまく導いていけるのではないかと思えます。お産の仕組みについて、お腹の赤ちゃんにも、お母さんにも、備わっている力がある、専門家から知識を得ることで、お腹の中の赤ちゃんとも一体感になれ、痛みその

ものも、痛みを構える気持ちの持ち方の角度が全く変わるように思います。

痛いという事には変わりはありませんが、私が妊婦さんに「陣痛ってどんな感じですか？」と聞かれるときは「痛いというのは、ウソではありません、痛いのは事実です、でもとても心地のよい痛みを味わえることが出来るのは、お産しか出来ないのよ。貴重な体感よ」とお話をさせていただくのです。そして「だってね、あかちゃんだって備わった力を振り絞って、早くあなたに会いたって思いながら、頑張るのよ、その時の体はね、こうなって、こうなってるのよ」と手振り身振りで話したりしています。そんなことを耳に入れることで自分の体のこと、お腹の赤ちゃんの愛おしさにきづくようです。

しかし、ばら色のイメージや、悪いイメージの与え方もバランスを必要とされているのではないのでしょうか。

そして「お産」の経過をとおして命の尊重ということにおいても妊婦だけではなく、小さな子供達の性教育などでも最近では取り入れられています。マタニティジャケットなどを身に付けたり体感できる授業の方法を、命を取り上げる助産師の手で広められております。

子供達は理論ではなく感情で感じる事が出来る。家族で子供を持つことの有意義な意識もうまれてくるのではないかと思います。

産前における意識の持ち方、お産の感激や満足感で得る達成感は、私に人生にとっても影響もたらしている。私だけではないはずです。

< 5 >

密室育児、核家族、おっばいのことなどから現実を迎えた育児不安の解消は助産師さんによる新生児訪問が増えるといいのではないかと思います。心のケアをお母さん達は求めています、そしてお産のトラウマから脱出できないまま気持ちを引きずっています。

とくに晩婚化の子育て、体力的なものが影響されます、そしてキャリアを積んだ女性がお産をし、今までの生活のギャップを感じ落ち込む話しを耳にします。

< 6 >

最近目にした、雑誌のコピーを添付させていただきます。

- ・朝日新聞 2/18付 家庭面 「結婚前からお産の知識を」
- ・アエラ 4/29号 マタニティ・ピンク
- ・女性自身 4月11号 「女が子供を産まないのには事情がある!？」

未来のパパ・ママ向け講座広がる

未婚者や子どもがいない夫婦者向けに、お産は本来自然な人間の営みであることを伝え、正しい出産教育が広がっている。男女共に、妊娠がわかるまでに出産の知識を学ぶ機会が少なく、怖い、不安、想像で苦しいという人が増えるなか、生命誕生のすばらしさを、産み方は選べるということを伝えるのが狙いだ。

「痛い、怖い」のイメージ転換

「お産は体力勝負。歩くなど運動をして、貧血状態にならない。これは本当は妊娠前からの準備だ」と

お産は産む体と心について産婦に知る助産師の三宅はつさ(41)さんの経験だ。7人の女性たちが熱心に聴き入っていた。

パース・ローチ・ナイターの大塚ナナコ(36)が東京都内で開いている「パース・コンシヤス講座」。全6回(年4回)開き、女性にやさしい出産の知識や、心身のリズムを整えるセルフケア術などを伝えている。

大塚さんは子育て関係の仕事などを経験した上で、自らの出産をきっかけに産教育の研修を国内外で受け、3年前から97年「桃の花倶楽部」を立ち上げ、

「パース・コンシヤス講座」では赤ちゃんの同様に産む大塚ナナコ(36)が、夫と二人で助産師の三宅はつさを訪ね、(同行)＝東京府立総合教育センター

命や体、自然への気づき促す



未婚時から学べる出産準備講座を開いてきた。

「命は守られながら迎えられるべきなのに、産むお産のイメージが先行している。女性は自分の体を知り、産む時期や場所を自分で決まり、お産を終える手助けをしてほしい」という。

大塚さん自身、助産師や三宅さん同様の産婦出産など4通りのお産を経験

し、昨年1月に第5子を産み、産んだばかりの「産む」ことには新鮮さを感じ、人々の生誕の瞬間、もうとて驚きたいという。

愛蔵者の横浜市、大塚生佐久間桂子(38)は、「痛い、怖い」というイメージを転換させる方法があり、将来の出産に必要知識だとわかった。自分の体を大切にしたいと願うようになった。

と話す。結婚の準備や子育ても忙しなかろうと、お産の準備やイメージを学ぶのは、お産のイメージを転換させる方法があり、将来の出産に必要知識だとわかった。自分の体を大切にしたいと願うようになった。

「産むことも学ばないままに産む」(1)のイメージを転換させる方法があり、将来の出産に必要知識だとわかった。自分の体を大切にしたいと願うようになった。

問い合わせ先
 ●桃の花倶楽部事務局 (03・5980・4103)
 ホームページ (http://www.momoc.net)
 ●きくちさかえさん (03・3808・3345)
 ●アースマンシップ自然環境教育センター (0422・20・8398)

02.2.18 朝日新聞 家庭面